

修辞学

柳澤 浩哉

昨年の修辞(学)研究は残念ながら盛んとは言い難い状況である。修辞・レトリック・比喩・メタファー・隠喩・換喩をキーワードに、国立情報学研究所の検索サービスCiNiiを検索しても、ヒットする論文は合計で132本に過ぎない(重複を含まず)。この中で広義の修辞学に当たると思われるものをおおよその領域に分けてみると、文学21、言語19、修辞・比喩9、社会(政治・経済・歴史・社会学・教育)26、哲学・修辞学史7といった内訳となる。

社会分野の論文では、キーになる表現や発想に着目して特定の言語現象を分析したものが多く、結果の意味づけに難しさのある方法だが、文学でもこの方法は多数見受けられた。これらの論文を概観して強く感じるのは、研究の積み重ねの貧弱なことであり、国内研究が引用されることは稀である。

昨年発表された研究の中から目を引くものをあげてみる。その第一は中村明他編『日本語 文章・文体・表現事典』(朝倉書店)であろう。第四章「レトリック用語の解説」には中村明氏の分類を元にしたユニークな用語が並び、用語の説明も密度の高いものが多く興味深い。唯一残念なのは、原語の修辞学用語との異同が示されていないため、各項目が西洋修辞学用語なのか、日本で作られた(変更を加えられた)ものか判然としない点である。半沢幹一『向田邦子の比喩トランプ』(新典社)は、『思い出トランプ』に

登場する比喩を作品ごとに語ったものである。向田邦子において比喩は単なる表現の道具でなく、人物造形の核の一つであったことを教えてくれる。森雄一「隠喩と提喩の境界事例について」(『成蹊国文』第44号)は、解釈次第で異なる比喩に分類される表現を集め、隠喩か提喩かという従来の二分法の中に、境界領域を認定すべきことを提唱している。村上靖彦「リズムの乱れ・メトニミーとメタファー 心的外傷と主体形成」(『現代思想』8月号)39巻11号)は、痛みの体験が、メトニミー(換喩)として潜在化すると恐怖症となる一方、「ごっこ遊び」のようにメタファーとして捉えられれば克服できることを述べる。提喩と換喩という違いはあるが、森論文との相似性が興味深い。

定延利之『日本語のぞきキャラくり』(三省堂)は、フィクションにおいて登場人物の性格を印象的に叙述する方法(キャラクター表現)の類型化を試みたもので、キャラクター表現を担う修辞技巧や言語形式が分類されている。ホームページに連載された記事を基にしているため、語り口は軽妙だが、言語学と修辞学の接点を模索した野心作として注目したい。例えば金水敏氏が提唱して話題となった役割語は、この枠組みの中に吸収されていくものと思われる。

(広島大学)